

長谷川榮先生を偲んで

樋口直宏

長谷川榮先生におかれましては、平成28年9月18日に享年83歳でご逝去されました。血液のご病気で定期的に入院治療をされてはいましたが、山中湖での研究会にも数年前までご参加下さり、晩年も私たちの来訪を快く受け入れて下さいました。最期も大きく苦しむことなく、あるいはそのような姿を見せなかったのかもしれないが、泰然として他界されました。

ご葬儀は、ご自宅近くの寺院で行われました。教育方法研究会会員だけにご案内をいただき、多くの会員が齋場での茶毘までお供してお別れをさせていただきました。奥様をはじめとするご家族ならびにご葬儀に参列下さった先生方におかれましては、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

ご逝去にあたり叙勲申請をしたところ、長谷川先生は正四位ならびに瑞室中綬章を受けられました。以下の付記は、申請の際に提出した「功績調書」や「業績一覧」の一部ですが、この内容は、『教育方法学研究』第12集（平成8年）で長谷川先生の筑波大学退官特集を組んだ際

に、佐々木俊介先生が執筆された文章をもとにしています。位記と勲章は筑波大学に届いたので、吉田武男先生と私ならびに若手会員が平成29年1月にご自宅に伺い、ご仏前に捧げ報告致しました。それと同時にこの日は、ご家族からご自宅にある多くの蔵書を教育方法研究会に寄贈いただきました。

長谷川先生が『教育方法学研究』第17集（平成24年）に書かれた最後の論文題目は、「教育とは何か」です。山中湖での研究会で、「これを最後にするから」とおっしゃりながら、長文の草稿を発表された姿は、忘れることができませぬ。「教育とは何か」という題目も、協同出版より刊行された単著『教育方法学』とともに、教育および教育方法学に正面から向き合われた、ご研究の集大成のように思われます。

長谷川先生のこれまでのご指導に対して、教育方法研究会を代表して感謝申し上げますとともに、ご冥福を心よりお祈り致します。

【付記】

功 績 調 書

長 谷 川 榮

同人は、昭和8年2月22日、埼玉県に生まれ、昭和30年3月、東京教育大学教育学部を卒業、昭和40年4月、同大学院（博士課程）教育学研究科を単位取得退学後、昭和40年4月、同大学助手に任じられた。昭和41年10月に新潟大学教育学部（長岡分校勤務）助手に就任し、昭和42年11月同学部講師、昭和44年12月同学部助教授に昇任された。昭和49年4月、東京教育大学教育学部助教授に就任した。昭和52年4月、筑波大学助教授教育学系に就任し、昭和53年4月同大学教授となり、同大学教育学研究科長を昭和63年4月から平成2年3月、教育学系長を平成2年4月から平成6年3月までの間併任し、平成8年3月、筑波大学を停年により退職した。同人のこの間の教育および研究等の顕著な功績により、同年4月筑波大学名誉教授の称号を授与された。その後、平成28年9月18日病により死亡したものである。

この間、同人は、東京教育大学、筑波大学にわたって、教育方法学と学習指導学研究室の伝統を受け継ぎ発展さ

れ、同分野の研究者、教育者としての役割を果たしてきた。教育方法学分野では、ドイツの教授学研究において国際的に評価される成果を挙げるとともに、それを発展させた授業研究において多大なる業績を挙げ、高く評価されている。

教育の面においては、筑波大学教授として長い間指導に当たられるとともに、東京教育大学教育方法談話会を母胎とする教育方法研究会代表として、多くの優秀な人材を輩出し、今日の指導的教育者・研究者を養成した。その会誌である『教育方法学研究』も、同人の編集刊行によるものである。

研究面においては、ドイツの教授学研究の分野において、教育思想および指導原理にもとづく授業研究に関する顕著な業績を残された。

第一に、同人のライフワークであるヴィルマン (Otto Willmann) 教授学に関する研究がある。「ヴィルマンの陶冶（教授）の特質」（東京教育大学『教育学研究集録』

第1集 1962年)では、財と学習者の働き合いが追究され、これを出発点として、以後、ヴィルマン教授学の社会的観点、教材観、歴史的観点、自立性と統一性、陶冶

目的、客観的観点、シユライエルマツヒェル教育学への接近、言語陶冶内容論、發生的方法、ブルシェンシャフトにおける活動、教師養成の実践と思想、と研究を継続され、ヴィルマン教授学の全貌を明らかにされた。特にヴィルマン教授学の成立過程の研究に特色が認められ、竹田清夫氏との共訳による『陶冶論としての教授学』(世界教育学選集 1973年)は高い評価を受けている。ヴィルマンに教授学の角度から光を当てておられる研究者は、日本では同人のみであり、これらの研究を通して、ヴィルマンの教授学を日本に紹介し、またそれを深められた。第二に、ドイツにおける範例方式に関する研究がある。これは同人が、ヴィルマン研究と並行して当時のドイツ教育も研究してみたいという意図で、大学院時代から進められたものである。論文「教材構成におけるエクセンブラリッシェ方式の意味」(山田栄博士退官記念論文集 『教育課程と世界観』1966年)、およびロート、ブルメンタル編『範例方式の授業』(三枝孝弘・平野一郎監訳 1968年)の翻訳を通して、範疇的陶冶の意味づけを明確

にされ、さらに範例方式を、単元構成や授業展開にも触れながら分かりやすく説明され、日本における範例方式の理解に大いに貢献された。

第三に、教授学をふまえた授業に関する実証的研究がある。その内容も教授学、教育的タクト論、教授的変換理論、思考論、学習論、合科教授、システムズ・アプローチ、カリキュラム論、評価論、生徒指導論、と多岐にわたる。「教授学の対象と方法」(筑波大学『教育学研究集録』第19集 1995年)では、教授学の対象と方法に関して六つの問いを設定し、幅広い文献を駆使して解答が試みられる。またこれらをふまえた実証的研究においては、筑波大学授業研究会を主たる足場にして大学院生を指導しながら研究を進められた。研究成果としては「授業における教授方略…『一つの花』の授業の比較分析」(日本教育方法学会『教育方法学研究』第17号、1992年)などがあり、そのユニークさが注目された。

こうした研究成果が内外の研究者の注目を浴びたことから同人は、西ドイツにおいて文部省在外研究員を務め、研究の国際化に努めてきた。

国内外の学会活動においては、日本教育学会会員、関東教育学会会員及び理事(平成5年から平成10年)、日本

教育方法学会会員、教育哲学会会員、日本視聴覚教育学会会員、日本放送教育学会会員、日本カリキュラム学会会員、日本教材学会会員及び理事（平成7年から平成24年）を務め、その発展に尽力した。

さらに、学外においては、同人は文部省小学校指導書教育課程一般編作成協力委員、文部省指導要録改善協力者会議委員等の要職を務め、文部行政および関連学問の発展に大きく貢献した。

以上のように、同人は戦後日本の教育方法学の発展に大きく寄与し、大学及び大学院における教育研究の充実に努め、多くの研究者、教育者を育成するとともに、筑波大学教育学研究科長、教育学系長等の職を歴任し、大学運営においても多大な貢献をなしており、その功績は誠に顕著である。